

日本周辺国際魚類資源に関する試験研究

(予算区分 受託 研究期間 平成18年～)

担当：水産技術研究所資源海洋科 石田孝行

【研究の背景とねらい】

カツオ・マグロ類など広い海域を回遊し国際的に利用される漁業資源については、近年、世界的な消費需要の高まりとともにその資源状態が懸念され、国際漁業管理機関によって様々な管理措置がとられています。日本周辺水域には多くのカツオ・マグロ類が来遊し、様々な漁業が行われていますが、これら漁業資源を持続的に利用するため、水産研究・教育機構を中心に全国22道県が連携した科学的な調査*により、対象魚種の資源評価を行っています。

本県では、近海で漁獲されるクロマグロとカツオの漁獲物の体長・体重測定調査の他、県内主要16市場におけるマグロ・カジキ類及び遠洋はえ縄漁業で混獲されるサメ類の水揚統計調査を実施しています。

*国際漁業資源評価調査・情報提供事業(H28-32)

【これまでに得られた成果】

- ・ 2015年のクロマグロの幼魚であるメジの水揚量は12トンで、2009年以降は低い水準で推移しています(図1)。また、カツオは約2.4万尾の尾叉長を測定し、334尾については年齢や成熟度調査のための精密測定と頭部や生殖腺のサンプルを収集しました。
- ・ サメ類の水揚量は236トンで、ヨシキリザメとアオザメが多くを占めました(図2)。

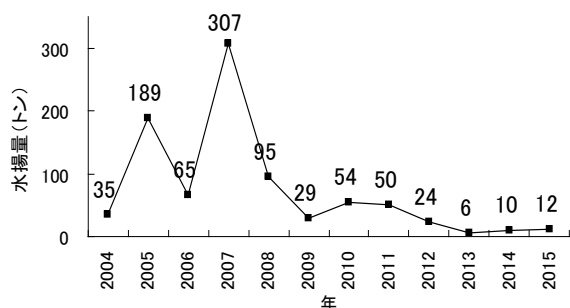


図1 県内メジの水揚量の経年変化

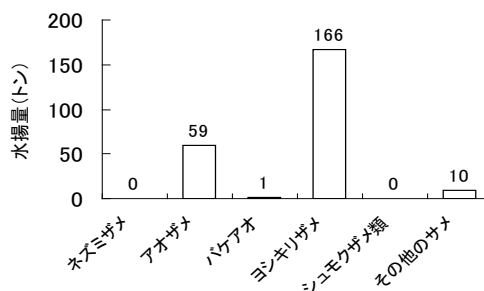


図2 サメ類の水揚量(2015年)

【期待される成果】

- ・ 毎年蓄積された信頼性の高いデータは、水産研究・教育機構 国際水産資源研究所がとりまとめ、国際漁業管理機関による資源評価に活用するとともに、諸外国との漁業交渉の場で日本の立場を主張する有力な裏付けとなり、関係漁業の経営安定に寄与します。
- ・ 資源評価に使用する漁業種別漁獲量、努力量、漁獲物の体長及び年齢組成、成熟度等の情報を継続的に収集することにより、太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類の適正管理に貢献できる他、カツオ・マグロ漁業が他生物に与える影響の把握にも貢献します。

【今後の計画】

県内主要16市場におけるマグロ・カジキ類、サメ類の水揚状況調査とクロマグロとカツオの測定調査を継続します。

(作成 平成28年4月)